© 東京新聞

生活

旬のさかな 蛤（はまぐり）

縁起の良い貝とされ、ひな祭りでは供え物とするほか、潮汁（うしお）を食すのが習い。夫婦和合の象徴として婚礼の祝事に用いられます。

くらしのこよみ
うつくしいくらしかた研究所

Dr.松井英男の 在宅医療のカルテ

●医療機器の進歩

医療機器の小型化により、これまで病院でしかできなかった検査が在宅のままでも可能になっています。超音波検査、脳波検査などの装置がその例です。最近ではコンパクトなものが開発され、ある程度の検査が患者さんの自宅でもできるようになっています。

訪問診療では、体温や血圧、血液中の酸素濃度や血糖値などの情報が必要になります。普段からこれらの測定結果を家で記録してもらい、データをまとめて医師側に送信する仕組みがあれば、あらかじめ患者の状態が正確に分かります。訪問看護師が電子聴診器を使えば、聞いた聴診音をそのまま遠くにいる医師が聞くこともできます。

データ解析に一役

血圧管理では、定期的な測定と記録によって、日ごろの血圧の変動を把握することが重要です。四年前の東日本大震災の際、避難所で被災者の血圧測定を続けたところ、多くの方が長期にわたり高血圧の状態だったことが判明。避難生活上の健康管理に役立つデータとなりました。最近、「ビッグデータ」という言葉を聞く機会も増えてきました。こういった、日々の生活におけるさまざまな体の情報をすべて記録し、その動向を解析して一定の傾向を知ることができれば、日常の診療にも大いに役立てることができます。

小型の「遠隔心電図計」を使った診察（一部画像処理）

当院では、これからの在宅医療を支えるもの作りの一環として、企業と共同して医療機器開発にも取り組んでいます。「遠隔心電図計」もその一つ。患者の前胸部に小さな装置をつけるだけでタブレット端末などにより心電図波形を見ることができ、さらにインターネットを介して遠隔地に送信することが可能です。今後は、一人暮らしで病状も見守りが必要な高齢者への応用を考えています。

（川崎高津診療所院長）

＝次回は十七日掲載